

編 集 後 記

今月号には、原著3編、症例報告24編が掲載されています。和文誌への原著論文の投稿が減少したと言われるようになったのは随分と前の事ですが、本誌も同様の傾向は明らかで、最近では各号に2~3編です。平均的な内容構成の本号ですが、症例報告を含め日本語の論文は読みやすく、報告された成績や診断治療内容はいずれも立派なエビデンスと言えます。そして、広く文献、資料の渉獵がなされ、十分に考察された論文は、たとえ Impact Factor のついていない日本語であっても、日常診療や新たな研究テーマのヒントや材料を提供してくれます。その意味で、欧米の一流紙といわれるジャーナルよりも、本学会会員の全体が受ける恩恵ははるかに大きいと思います。

研究者としての個人は、著した論文の Citation Index によりその能力が云々される現実があり、研究成果の評価はエビデンスレベルという言葉でなされることも多いわけですが、それらは永久に不変のものと言えるのでしょうか。医学が科学の一分野であるなら、研究や症例報告の価値は将来的に評価が定まるものであり、発表された言語が何であれ、価値あるものは必ず評価されると考えます。研究成果や貴重な臨床経験は、医学・医療に携わる者の共通の財産として、とにかく明確な記録として残さなければ小さな個人的経験に終わるということだけは確かです。

本誌の編集委員会では、委員長をはじめ各委員が総じて独創性、稀少性にこだわり、投稿された論文の質が更に向上し、貴重な研究成果や症例が科学的な記録として残るよう、非常に大きな努力を払っています。その成果が学会誌ですので、会員の皆様にはぜひともこのジャーナルを手に取り、あるいはインターネット経由でお読みいただきたいと思います。

本誌に掲載された論文内容も、読者は日本語を理解する人に限られるかもしれませんが、英文紙と同様にエビデンスとして永久に残るものです。投稿された論文が医学・医療の発展に寄与する何らかの内容を含み、投稿規定に沿ったものであれば、それぞれの領域の専門家である編集委員や事務局が本誌に掲載されるよう最大限の協力をしてくれます。そのような本誌、本編集委員会の姿勢を知っていただき、それぞれの会員が持っておられる貴重な研究成果や経験をぜひとも投稿し、エビデンスを残していただきたいと願っています。

(河野 辰幸)